

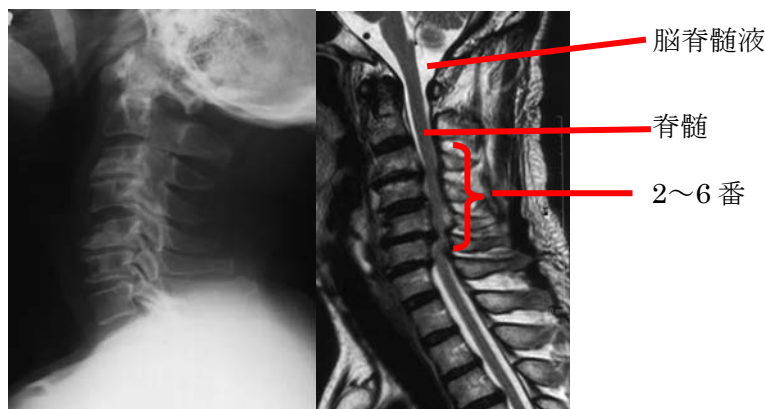
頤椎の病気

頤椎の病気とは、椎間板ヘルニア、靱帯骨化症、頤椎症性骨髄症です。

症例①：発育性脊柱管狭窄，変形性頤椎症

70代の男性が右手がしびれますとって来たんです。よくお話を聞くと、5年前から右手の4，5指にしびれがある。4，5指のしびれというふうに言われただけで頤椎の6，7番目くらいに圧迫があるか，あるいは尺骨神経に障害があるか，どちらかですね。5年前からというのでは，悪性のものではないということですね。しびれの範囲が徐々に広がってきたとすると，そうすると尺骨神経ではないんですね。これはもう脊髄だなど。2年前から今度は左手で，脚もしびれる。箸が使いにくく，書字が下手になってきた，巧緻運動障害もある，階段を降りるのが怖くなり，転びやすくなってきた，痙性といって，脚が突っ張るようになってきた，腱反射をとると，間違いなく腱反射を亢進している，トイレが近くなって残量感がある，まるでこれは教科書に載るような経過なんです。

これは先ほど言ったように，緩徐進行性，非対称性，巧緻運動障害，歩行障害，排尿障害，これはもう間違いなくと言っていいくらい，頤椎症性脊髄症という診断になります。画像を見てみますと，脊柱管が実際には16mmというのが成人の正常ですね。しかし，この患者さんには12mmしかなかった。9mmくらいの正方形の脊髄をいれているのに12mmというのは非常に窮屈なんですね。狭いんです。それで骨の変形，椎間板の脱出などがあるので，神経が押されている。

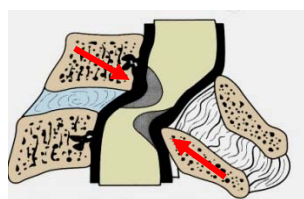


MRI画像ですが，黒い部分が脊髄ですね。脊髄がずっとあって，脊髄と，その骨の間にある白い部分が脳脊髄液という先ほど言った水の部分ですね。水がバッファになって硬い骨に当たらないようになっている。ところが，頤椎3，4，5，6番目，このあたりは硬い骨，あるいは飛び出した椎間板が脊髄を直接押していますね。そのために脊髄の障害が少しずつ進行してきたということですね。こういう病気が頤椎症性脊髄症という病気で

脊柱管は、正常では日本人の場合16mm、12mmをきりますと、神経がギリギリの状態。だからちょっとヘルニアがあったりちょっと靭帯が厚くなったりしただけで症状が出やすいと。だから同じ変化がおこっても、背骨が狭い方は症状が出やすいんですね。

症例②：脊椎不安定症

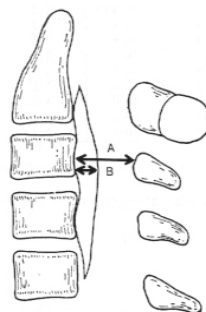
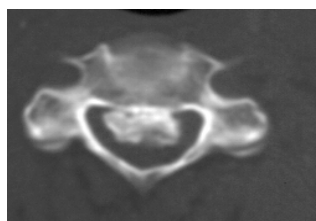
これも70代男性のケースです。数年前から脚がしびれて、歩行障害がある。脊柱管は狭いことは狭いですが、さっきの方のように、ガタガタしていないんですね。しかし、頰の骨を後ろに曲げて見てみますと頰の骨がずれるんですね。これは不安定性といって、靭帯が緩んできてしまったんです。このためにぐらぐらしてきてしまうので、頰を上を曲げると、神経が押されてしまうという動的な不安定性（Pincer Effect）が起こってきて、神経症状が起こってくるということです。頰髄が悪い方は、まっすぐ向いているといいけど、特に女性の方だと、美容室に行ってシャンプーをしてもらおうと手がしびれてくる方がいたり、あるいは俯いてパソコンなんかをずっとしていると手がしびれてくるという方がいたりします。



Pincer Effect

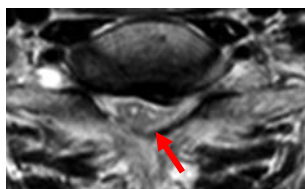
症例③：後縦靭帯骨化症

60代男性のケースです。この方は後縦靭帯骨化症ですね。これはもともと薄い靭帯の膜があったのですがこんなに厚くなって、石灰化してきたということですね。レントゲンでも石灰化した骨が見えます。



頸椎病変に必要な画像診断

頸椎診断に必要な画像診断として、どんな画像が必要ですかということですが、まずレントゲン、MR I。MR Iを輪切りにしますと、



Snake eye sign

脊髄は正常なら丸くなっているはずですが、ぺちゃんこになっている。神経が白く見えるところは傷んだところですね。ちょうど頸椎症の場合には、蛇がこっちを見ているような、これは感覚の問題ですけど、蛇の顔と、これは蛇の目だと思うのですが、**Snake eye sign**と呼んでいるんですが、こんな形になってきたら間違いなく頸椎症ですね。あとはCTスキャンで靭帯の骨化があるかどうかをみると、こんな検査が必要です。